

デージー図書の製作で録音順序が変わります

盲人情報文化センターでは、デージー図書の製作を開始しましたが、それに伴い録音図書の枠アナや録音順序を若干変えました。

これは、カセット図書とデージー図書を平行して製作する為に改正したものです。基本的にはデージー図書になっても録音順序などはこれまでと変わりませんが、デージー図書の利点を生かせるように、また、カセットテープでも混乱の起きないように配慮しました。

デージー図書の利点は、ページが分かれば瞬時にそのページに移動出来ます。この利点をできるだけ生かすようにしました。索引も今まではほとんどカットしてききましたが、これからは利用が可能になります。瞬時にそのページに飛べたり、該当の項目に飛ぶことも可能だからです。今後はデージー図書では索引も読むようにしました。(但し、カセットテープ図書の方には入れません。)

製作の流れは、最初にカセットテープ用のマスターを作り、その後、デージー図書を製作することになります。以下は、これまでと変わった点です。

① シリーズ名がある時は「原本奥付」で読む。今後は最初には入れない。

これまではシリーズ名は最初に入れていましたが、デージー図書では最初に書名を読み上げてくれる為、本によっては3回、シリーズ名が続くことになる為です。

② 頭の枠アナは、「製作館名と製作年」までとし、「音声訳者、校正者、編集者名」は今後は入れず、最後の枠で入れる。

→ **シリーズ名(入れない)** ○○著、○○○、テープ全○巻の第1巻A面、日本ライトハウス盲人情報文化センター、1999年製作、**音声訳、○○、校正、○○、編集○○(今後は入れない)**

※「テープ全〇巻の第1巻A面」はデジ書では必要ないので後でカットするが最初に入れる。

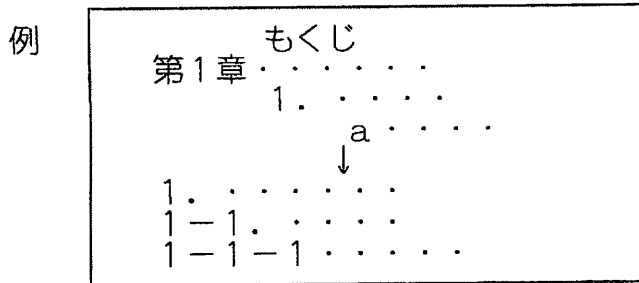
③録音図書凡例について

・トーンインデックスは今後使わないので録音図書凡例でコメントしない。

※デジ用の録音図書凡例はデジ編集者が指示するのであとで別のMOに録音する。

④目次について

・目次はできる限り階層が分かるように読む。



※デジでは各項目に瞬時に移動できるので、どの階層かがすぐに分かるようにする為。

・目次に出てきた項目は頁付がなくても原則として頁を読む。

※頁が判ればすぐその項目に飛ぶことができる。

⑤索引について

・索引はデジ書では活用が可能になるので読む。但し、カセット用としては読まず、後でデジ用として別に読む。その際、デジ書の録音図書凡例でそのことを紹介する。

⑥最終巻の終わりの枠アナが変わる。

・旧 以上で、(シリーズ)〇〇著〇〇〇 テープ全〇巻を終わります。

・新 以上で、(シリーズ)〇〇著〇〇〇、を終わります。製作完了・・・(後は同じ)

・デジ用の最終巻の枠アナは編集者名を入れる。指示はデジ編集者がする。

※注意 最後の枠アナは、『・・・編集は、〇〇でした。』と「でした」を入れること。「この後には・・・」のコメントは今まで通り忘れずに入れる。

⑦ (○△◇●○の項参考) / (第●章・・・参照) といった文章の場合はかならず該当のページ数を言い添える。

→ ○○ページ、○△◇●○の項参考 / ○○ページ、第●章・・・参照
 ※必要と思えば瞬時のそのページに飛び聞くことができる為。

以上が今回の改正点です。

*グループでデジ書製作を検討されているところは、まずはカセットマスターを今まで通り製作し、それをカセットデッキ（TC-RX1000T）でパソコン（デジソフト）に取り込んで編集するのが一番はやく製作できる方法です。ミキサーを使わなくても流し込むこともできるようです。

先月の例文の処理例

練習問題 1

それはさておき

.....

それからまた本筋にもどる時のきまり文句が、「閑話休題、言帰正伝」なのである。「余談はこれまでといたしまして、本来のお話にもどります」という意味である。略して前半の「閑話休題」だけですますこともしばしばある。

ややくわしく説明すると ー

「^{シエンホウ}閑話」は余談。

「^{シウ}休」は英語のdo not にあたる助動詞で、「...しない」「...するな」の意。

「^{タイ}題」は「（話を）持ち出す、する」という動詞。したがって「休題」で「（余談は）やめにする」の意となる。

* 「^{シエンホウ}閑話」は余談・・・。

→この文章を単なるルビの処理として、「^{シエンホウ}カンワ、は余談、^{シウ}キュウ、は英語の・・・」と読むと聞き手には文章が正しく伝わらないでしょう。

中国語のルビは補足的なルビとして扱うほうが分かりやすくなります。

→「カンワ、中国語読み、^{シエンホウ}は余談。キュウ、キュウダイノのキュウ、中国語読み、^{シウ}、は英語の・・・^{ダイ}、キュウダイノダイ、中国語読みアイ、は・・・といった読み方になりそうです。以下は、同様の処理でいけそうです。

人名調査は入念に

財部 彪
後宮 淳

何と読みますか。二人とも第二次大戦中に活躍した軍人で、今や歴史上の人物と言っていると思います。財部はザイブ、後宮は「君の名は」を思い出してアトミヤと読むと、どんなに調べても人名辞典で見付けることはできません。

日本人の姓や名は、同じ漢字でも時に幾通りもの読み方があります。

山上 サンジョウ、ヤマカミ、ヤマガミ、ヤマジョウ、ヤマノウエ

コンピュータで検索したり、漢字で調べられる辞書をひく時には問題ないのですが、五十音順に並んでいる普通の人名辞典をひく時には、その漢字のすべての読み方をひいてみる必要があります。その漢字にどんな読みがあるか、それを調べるには、日本アソシエーツ「日本姓名よみふり辞典」姓の部・名の部をひきます。

日本人の、特に姓は、古くから代々受け継がれて来たものですから、呂比須など特別な場合を除けば、殆どすべての姓がこの辞書に載っています。

財部は、サイベ、タカラベ（ザイブの読みはありません。）

後宮は、アトミヤ、ウシロク、ウシログ

読み方を確かめて人名辞典をひけば、ちゃんと載っています。例え小説でも登場人物が実在の人の場合はよくあります。調べても見つからなければ推測読みをすることになりますが、載っていないと決めるまでには十分な調査が必要です。音だけで言葉を覚える視覚障害者にとっては、違う読みなら別の人です。人名の調査は入念にしなければなりません。

なお「日本姓名よみふり辞典」には、色々な読みのうち一番多いもの、その次に多いものに印がつけられています。推測読みの参考にするといいと思います。

☆☆☆☆☆☆ 今月の練習問題 ☆☆☆☆☆☆

杖とは何ぞや

いったい杖とは何だろうか。

何であろうかという疑問符の記号はクエスチョンマーク「？」

これは人が首をかしげて物を尋ねている姿からきているともいうが、この記号の下

の方の”・”は地球、アトムで、その上の曲がったものは古代のlituusという錫杖^{しゃくじょう}だという説もある。

未知の丸い地の球の上に問いを発する予兆占いに用いる杖が、威圧的につっ立って”いかにして””なぜ”と相手に永遠の対話をしている科学の紋章の符号だという。

このように疑問が杖で示されているように、杖とはわかっていそうで不可解なものであるが、『広辞苑』には、

①歩行の助けに携える細長い棒。転じて、たよりにするもののたとえ。②拷問や罪人を打つのに用いる棒。律令制では長さ三尺五寸、太さ三～四寸のもの。③（丈とも書く）古代の長さの単位。ほぼ一丈（約三メートル）に相当。弓一張りの長さや、中世の地積の単位。④梨の実のほぞ。

などと出ている。

『大漢和辞典』には、

杖とはチャウ、チャウ。①歩行のたよりに執持する竹・木の棒。②つえつく。③もつ、とる。④よる、たよる。⑤むち、しもと。⑥五刑の一つ杖刑。⑦むちうつ、たたく。⑧柄。⑨丈に通じる。仗は俗字であるが特に兵仗、儀仗の時は仗にする。

とあり、いずれの辞書でも大同小異である。

それでは杖という語源をさぐってみよう。

『日本国語大辞典』などを引くと、

ツクスエ（突居・衝居）の略〔和訓栞・大言海など〕。ツキ〔衝居〕の義〔言元梯〕。ツキエ（突枝）の略か〔大言海〕。ツクエダ（突枝）の義〔和句解・日本釈名〕。手と地とを連ねてツク枝の義〔日本声母伝〕。ツはツク（衝・突）の語幹、エは枝の転〔日本古語大辞典他〕。ツキーヲエ（小枝）の義か〔雅言考〕。ツクウデ（突腕）の反〔名語記〕。ツキエル（衝殖）の義か〔名言通〕。

などとある。

どうやら細長い物を押し立ててささえとするという”突く・衝く”に関連してくるようだ。そして、ツクエダ、ツキエ、ツクエ、ツエと言っているうちに杖と机とは同じ語源から出てくるのではないかと私には思えてきた。このことはすぐには理解できないでしょうが、古代の机は現在でも伊勢の神宮で用いられている【木若】案^{しもとあん}という長い木の枝を結んで平面にした案^{あん}という机である。

このことは恩師の小野祖教先生が「玉串と幣帛」（『禮典』一号）に「つくゑの前身はつける杖であったと思う。物を木の枝につけたから、その杖をつくえと呼んだ」と主張し、「つえの前身は、物を縛りつけて支えて置く長い棒、長い木の枝」だと記されていた。これをくわしく説明していると先に進まぬから、またあとで記すことにして、ひとまず杖も机も一つの語源から出て、杖のつも、机のつくも附・着に密接な関係があろうとし、突く枝が語源でなかろうかとしておこう。語源というものは古いものほどわからないものが多い。

杖の字源は『字統』や『字解』によれば、声符は丈^{じょう}。丈は杖をもつ形で杖の初文。兵器として用いるものを仗^{じょう}という。木扁であるのは木製が多かったからであろうが、○と記すこともある。これは竹製である。

ついでに長という字は長髪^{ながげ}の老人が杖を突いている形で、氏族の長老を意味する象形文字だという。

英語ではステッキ。スティック(stick)の訛りである。これは本来、木の杖とか棒の意で、正しくはウォーキング＝スティック。またはスタッフ(staff)とか、ケーン(cane)ともいう。

『言葉に関する問答集』より 文化庁編

問：「極彩色」は「ゴクサイシキ」か
「ゴクサイシヨク」か

答：「極彩色の絵看板」のように、はでで濃厚な色どりを「極彩色」と言うことがある。この「極彩色」を「ゴクサイシキ」と読むのか、それとも「ゴクサイシヨク」と読むのかという問題である。

「極彩色」は、「彩色」に「極」を冠したもので、江戸時代から用例が見られる。浄瑠璃では「ゴクザイシキ」と読んだ例があり、国語辞典でも、明治期の『言海』(明治37)などは、それを見出し語形としている。現代の国語辞典にも、その語形があることを注記するものがある。これを「ゴクサイシヨク」とも読むことは、現行の辞典にも記載がなく、誤用と見て差し支えないが、近ごろ耳にすることの多い言い方である。

「彩色」は中国から入った語で、奈良時代から文献に見られる。古い用例には、「綵色」とするものもある。「彩」は「いろどり」、「綵」は「あやぎぬ」の意味で、元は別字であるが、「美しく色付けする」という意味で、通用して使われる。この読み方が「サイシキ」であることは、院政期の『色葉字類抄』、近世初頭の『日葡辞書』などで確認される。ところが、近年、国語辞典では、これに「サイ

シヨク」という読み方を認めるものが増えてきた。

現行の国語辞典十八種のうち、九種は何らかの形で「サイシヨク」という読み方のあることを示している。また、そのうち二種は、「サイシヨク」という語形で、参照見出しを立てている。これは、「色」に、シキー呉音、シヨクー漢音という二種類の字音があり、シキ→シヨクという交替現象を起こしているためと考えられる。

まず、「色〇」という二字熟語について見ると、これらはすべてシキで、例外はない。

色界 色覚 色彩 色紙 色情 色素
色相 色調

それに対して、「〇色」という二字熟語には、シキと読むものとシヨクと読むものの両方がある。

〔シキ(ジキ)〕

禁色 五色 金色

〔シヨク〕

異色 脚色 血色 原色 出色 染色
着色 特色 物色 配色 敗色 変色

これから分かるように、「ーシキ」という熟語は数も少なく、古くから使われているものである。一方、「ーシヨク」は近世以前から使われているものもあ

るが、近代以降の新しい語を多数含んでいる。右に挙げていない例には、「三色（サンシキ／サンシヨク）のように両形を持つものがあるが、「ーシキ」の方が古い語感を伴う。また、「気色（ケシキ／ケシヨク）」などは、別語と見るべきであろう。

さらに、「〇〇色」のような三字熟語になると、特殊な語で「木蘭色」（モクランジキ）などが無いではないが、現代語としてはすべて「ーシヨク」である。

郷土色 国際色 中間色 天然色 反対色 保護色

三字熟語でも、「無彩色」「有彩色」などは、「〇〇ー〇」か「〇ー〇〇」か、判断に迷うところがあり、現在の国語辞典でも扱いがゆれている。しかし、語源的には「〇〇ー〇」のように考えるべきである。そのほかの三字熟語にも、「灰白色」「黒褐色」「退紅色」など、語構成の分かりにくい語も少なくない。

「彩色」が「サイシヨク」とも読まれるようになったのは、古代から使われているにもかかわらず、現代でもよく使用

されるので、新しく造られた語のように意識されるためもあるからと考えられる。また、「極彩色」が「ゴクサイシヨク」と読まれるのも、それに影響されたものと見られる。さらには、「極彩色」の語構成意識が薄れ、「天然色」などの連想から「〇〇色」という構成の三字熟語のように意識されるようになってきていることも、関係があるだろう。

それでは、これらの「サイシヨク」「ゴクサイシヨク」という読み方を一般的なものとして認めてよいかとなると、問題は残る。先に示したように、国語辞典では、前者についても半数、後者についてはすべてがその読み方を認めていない。また、NHK編『日本語発音アクセント辞典』（日本放送出版協会、昭和60）では、「サイシヨク」「ゴクサイシヨク」のどちらも、許容の読み方としても示していない。このような事情を考えると、これらの読み方を一般的なものだとするのは、時期尚早だと見られる。

お知らせとお詫び

当分、『ろくおん通信』は隔月発行になります

『ろくおん通信』はこれまで年10回の予定で発行していましたが、大変申し訳ございませんが隔月発行に変更させていただいております。

今後の発行予定は、99年6月、9月、11月、2月です。悪しからずご了承ください。

近畿視情協録音製作委員会主催

第5回 録音図書製作グループ音訳研究会のご案内

～ 日程が変わりました ～

日時 : 1999年6月4日(金)
午後 1時半～3時半

場所 : 盲人情報文化センター9階ホール

テーマ : カタカナ語・外国語の処理

助言者 : 近畿視情協英語チーム 上田道子氏

*先月号『ろくおん通信』の109号で5月21日(金)でご案内していますが、6月4日に変わりましたのでご注意ください。

利用者から製作依頼を受けている原本

- 『現代のエスプリ ゲシュタルト療法』 倉戸ヨシヤ編 <精神分析>
- 『部落起源論』 石尾芳久著 <社会科学>
- 『キリスト教倫理の今日的課題』 東京神学大学神学会編 <宗教>

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

今回引き受けて頂いた 原本とグループ

- | | |
|---------------------------|-------|
| 『福井隊長を偲んで』 烈衛会有志編 <伝記> | ICCB |
| 『背筋も凍る病院の怖～い話』 ホラークラブ編 | 〃 |
| 『バルザック全集 第4巻』 新庄嘉章他訳<文学> | えくてもあ |
| 『民法(6)契約各論』 第4版 遠藤浩他編<法律> | 〃 |
| 『スウェーデンの障害者政策』 <法律・報告書> | 〃 |